

遊びのスクランブル交差点 (5)

文字のある遊び おみせやさんごっこ

仲 明子

◇ 文字のある遊び おみせやさんごっこ

おみせやさんごっこは、昨冬三か月の間、毎日のように遊び続けられた。春になると、また、神社の境内や庭で遊ぶようになっていった。今年（平成四年）の冬は暖冬だったので外遊びが途切れることなく続いた。

けれども、この一年を通して、外遊びができない日に、我が家の六畳に二、三人も集まると、早速、おみせやさんごっこが始まるのだった。

私はその傍らにあって、どうしてこの遊びが一年もの間、子どもたちに遊ばれ続けたのだろうと、不思議に思っていた。

そんな今年の一月、Nがれすとらんの「めにゆう」を自分で書いた。

C いらっしやいませ なににしますか。ああ、メニューは？

N それが、なくなっちゃったの。

C おばちゃんにかいてもらおうよ。

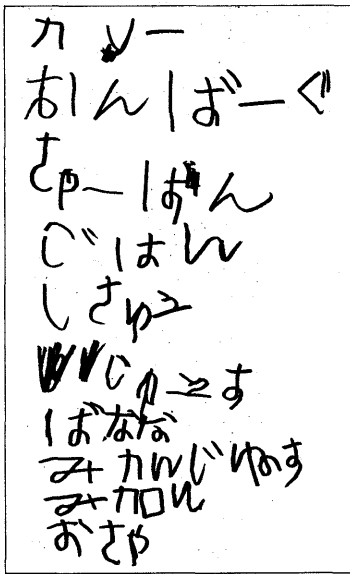
N いいよ。わたしがかくから。

書けない「ゆ」などは私が掌に書いたのを見て書き写す。でき上がったその紙を二つ折りにして、その表に

「めにゅう」と書く。(図1)

私はこのでき上がった「めにゅう」を見て、びっくりした。

ひらがなが十分に書けるとは言えないNが、遊びに必



▶ 図1. Nのめにゅう (H4. 1)

要なメニューを私に頼むのではなく自分で書いたことに、また、外食をあまりしたことのないNが、書いた紙を二つ折りにして表に「めにゅう」と書く「形式」を、何かの機会に知り、自分なりの「メニュー」のイメージを持っていったことに。

そのとき、私は、この遊びが六畳で始めて遊ばれた「文字のある遊び」であり、その中で彼らが次第に「書くこと」を楽しむようになっていった遊びであることに、気づかされていた。

では、彼らは、この遊びにどのように文字を取り入れ、「書くこと」を楽しむようになっていったのだろうか。

それをまず、この年頃の子どもたちが、暮らしの中で「書くこと」とどのようにかわるようになっていくのかということ、我が家の第一子Lと第二子Nの兄妹について探ってみようと思う。

そして、それを手がかりに、彼らがこの遊びの中で「書くこと」をどのように楽しんでいるのかを探ってみ

たいと思う。

そうすることで、なぜこの遊びが一年もの長い間、彼らに遊ばれ続けたのかを探ることもなると思う。

◇ 暮らしの中の「書くこと」に探る

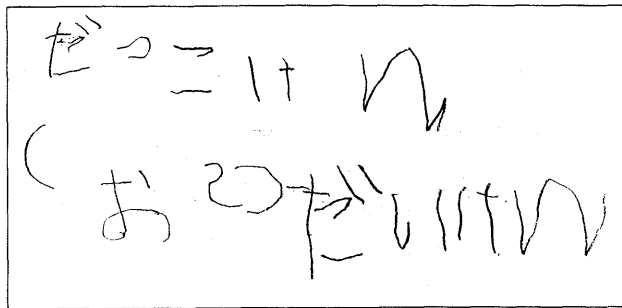
(1) 必要にせまられて書く

だっこけん 夕食後、L（六歳半）とN（四歳三か月）が私の膝を取り合っていた。私がおざけて、「膝に乗る人はだっこけんを下さい。」と言った。Lはすぐにマーガリンの空箱を持って来て、その一部を切って「だっこけん」と書いて指輪のように丸めたものを作った。それは一回だっこをもらった後で一回おてつだいをします（Lはその日後で肩をたたいてくれた）というものだった。私の膝の上でそれを見ていたNは、突然激しく泣き出した。そして、「私は字が書けないから、だっこけんができない。」と言った。

そのとき私は、兄のLには今までして来なかった、

「文字を書くことを教える」必要を感じていた。

私は一瞬ためらった後、膝の上にいるNの手を取って一緒に「だっこけん」を作った。それはメモ用紙を二つ



▲図2 Nのだっこけん（H2. 秋）

折にして、表に「だっこけん」、裏返すと「おてつだいけん」と書かれていた。(図2)

Nはそのできばえに満足していた。そして、書くことを随分身近に感じている様子だった。Nはひらがな(お手本)を書き写すことで自分も「書くこと」ができることに気がついたのである。

その日から、Nは一生懸命に「だっこけん」を作った。なんとか作ったそれを一枚持ってやって来ては私の膝に乗り、すぐ降りては肩をたたいてくれた。すでにNは私の膝に乗りたくて券を作っているのではなかった。

Nは券を作ることを楽しみ、文字が書けることの威力を確かめていたのである。

このように、日々暮らしの中のおもしろいことは、たいていLが考え出すのであるから、そのLと互してやっっていくには、Nは背伸びして自分の能力を精いっぱい発揮する必要にせまられているのである。

必要がある——見ていて自分も作りたいと思い、その券が無いと膝に乗れないと思った——から精いっぱい頑

張ったら書けたのである。その後から「書く楽しみ」はやって来たのである。

結果として、Nは券に使われているひらがなは、曲がりなりにも書き写すことができるようになった。

私はNの精いっぱいその姿に、「書くこと」の始まりは、必要にせまられて一字一字書き写す——まねをする——ことなのだと改めて知らされた。

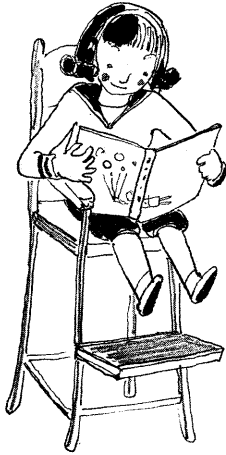
(2) 機が熟して書く

はたけでとれたおいもです——降園のとき、今日いもほりをしたこと、カゴに入っているのがそのおいもであることを先生が話された。早速、カゴを取り囲んで、その大きさのみごとなことに母親たちの話はずんでいた。その私の耳元で「おかあさん、あれ、ぼくがかいたんだよ。」とLがささやいた。「え——。」と驚いた私は、近づいて、今度はそのカゴに張られた紙を見た。

おもいものカゴを運んでいたLたちに先生は、「書けたら『はたけで……』と書いて張っておいて。」と言われたと言う。それは一年保育の川崎市立I幼稚園に入園してまもなくの頃で、Lはすでに六歳になっていた。

それまでのLは、絵本や広告の紙の中からいくつかの文字を模様や絵とまねるように別の紙に書き写し、私に見せてくれていた。そんなLにとっては、ひらがなだけでなく、数字もカタカナも漢字もアルファベットまでもが、同じように文字であり興味の対象だった。

だから、私はLがいくつものひらがなを書けることも、自分の名前を漢字で書こうとする意欲があることも



知っていた。

けれども、私たち大人との暮らしの中でも、妹のNや友人T・Yとの遊びの中でもその日に先生がしたような要求を、Lにした者は誰もいなかった。そのときまで、Lは「文字を書く」必要のない暮らしの中にいた。

だから、私は、Lの中で、文字を使いこなす力や興味がそれほどまでに育っていることに気づいていなかった。その日、私はLがひらがなを伝達の道具として使いこなせるまでに機が熟していたことに驚かされた。

このように、Lにとって幼稚園生活の始まりは、文字のある生活の始まりとなった。

十分に機が熟していたLは、文字を使いこなすことで「書くこと」を楽しみ始めた。

(3) 大きくなったしるしとして書く

朝の仕度メモ N (四歳八か月) はいよいよ週二回の自主保育に通うことになった。その話を私の横で聞いていたNは、

1 はみか
2 かおあらい
3 といれ
4 はんかち・ちりび
5 ついた

▲図3 Nの朝の仕度メモ(H3.4)

「それなら用意をしなくちゃ。」と言うが早い、メモ用紙を持って来て何やら書き始めた。(図3)

それは、Lが一年前に冷蔵庫の側面に張ったものと、そっくり同じだった。

Lは登園の仕度、がスムーズにできるようにと、自分で考えてメモ用紙に五つの仕度の項目を書いた。それから毎朝、「一番終わったよ。」「今度二番。」……「全部終

わったよ、お母さん。」と賑やかなLの声が聞かれた。

Nはそれからの一年間、毎朝そのメモを見ながら仕度をするLの傍らで過ごした。

私はNのメモを見たとき、Nが、兄の通う姿に大きくなって通う自分の姿を重ねていたのだと気づかされた。

そこには、大きくなって通園するときには私もあずるのだというNの思い——憧れ——を見ることができよう。

Nは一年前の「憧れ」を実現するために、メモを書いたのであった。

それはLのように、機が熟して書いたのではなかった。背のびして自分の能力を精いっぱい発揮して、それでも足りない分は母に助けってもらって書いたのだった。

やっと自分にも通う所のできたNは、兄のように大きくなったしるしとして、兄と同じように自分も朝の仕度メモを書いたのである。

◇ 「書くこと」を楽しむ様子を探る

(1) 大人から形式を取り入れる

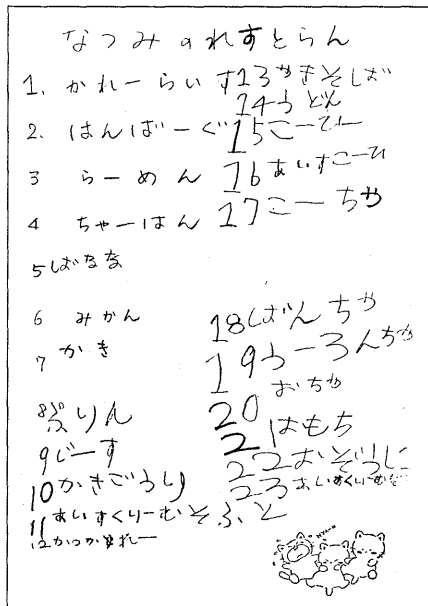
Oのめにゅう CとNに頼まれてノートに各々のメニューを書いていると、Oが今度はOのメニューを書いてほしいとやって来た。Oの言う順に四番まで書いたとき、Oは私からノートと鉛筆を受け取って、自分で続きを書き始めた。(図4)この三人のメニューを書いたノートは、それ以後、れすとらんが開かれるたびに準備され使われた。

Oはレストランにはメニューがあり、それにはそのお店で出す食べ物の名前が書かれていることをすでに知っている。

かれーらいす、はんぱーぐ、らーめん、チャーはん、まず、Oが言ったのは、今までにレストランで食べたもののなかのだろう。

これは、このメニュー(という形式)が大人との生活から遊びに取り入れられたものであることを示している。

◀ 図4 Oのめにゅう (H.2. 12)



けれども、それに続いてOが自分で書き並べたのは、それよりももっとOの身近にあると思われる食べ物——果物、デザート、飲み物、それに最近食べたと思われるおもちゃやおぞうに——であることに気づかされる。

メニューを作っていたOは、いつの間にか知っている食べ物の名前をつぎつぎに並べて書くこと——食べ物づくし——を楽しんでいたのである。こうして、「Oのめ

にゆう」はでき上がった。

ひらがなを駆使して食べ物づくしを書くこと——これは、すでに機が熟したOに生まれた「書くこと」を楽しむ姿であろう。

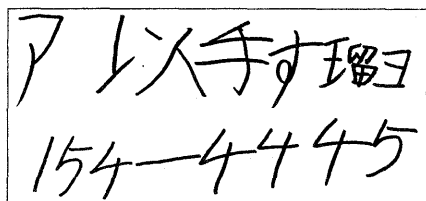
私はOのメニューづくりに出会ったことで、大人から取り入れた「形式」にそって書くことを楽しむ過程に生まれた、もう一つの「書くこと」を楽しむ子どもの姿があることに気づかされたのである。

(2) 形式を共有する

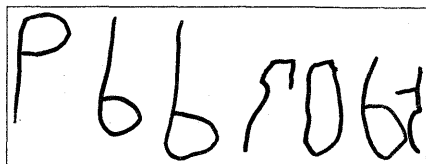
電話番号

Hがりょうこうセンターを開いて電話番号を書き込むと、その日からしばらくは電話番号を書くことが遊ばれた。一月ほどたったある日、Lが台所にいる私の所へ「広告でーす。」と一枚の紙を置いていった。入れかわりNがやって来て、「広告でーす。これ銀行の電話番号。」と二つ折りにした紙の表に数字の並んだものを置いて行った。(図

5)



A 以手す瑠
154-4445



P 66 7067

▲図5 L—上段とN—下段の広告
(H4. 2)

この日、H(小一)は紙にお店の名前と一緒に電話番号を書き込んでみんなに知らせる(後の広告)という形式を大人の生活から取り入れた。

横で見えていたLとNは、早速まねをして、持って来た紙に、自分たちの名前と電話番号を書き始めた。

私は、その場に「ずるーい、まねをして。」という声を予想した。けれども、そんな声が聞かれることはなかった。

私は、そこに、彼らが「書くこと」——自分の番号を決めること、それを書き込むこと——を楽しんでいる姿を見た。

そのとき、私はまねをしたのが形式であり、知らせる内容——番号はひとりひとり違っている——ではないことに気づかされた。

彼らは、友と同じことをしている——形式を共有している——一体感をも楽しんでいた。

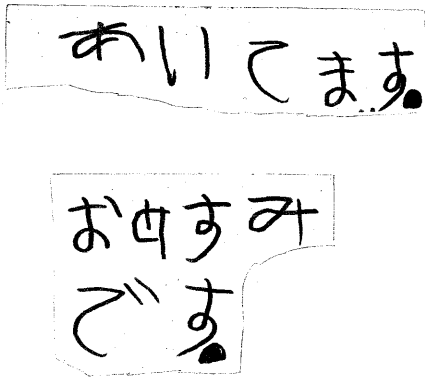
さらに、Lが「広告」という形式を取り入れたことで、遊びの場は台所にまで広がった。

このように、この遊びに文字があることで、彼らはまねをする——形式を共有する——ことを楽しむことができ、それが遊びの場に広がることで「書くこと」を楽しむことを共有でき、さらに、遊びの場も広がることができた。

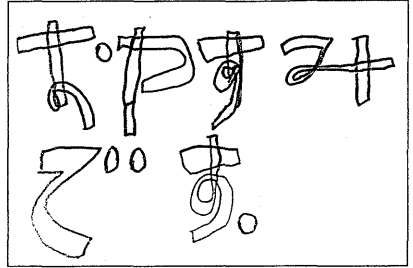
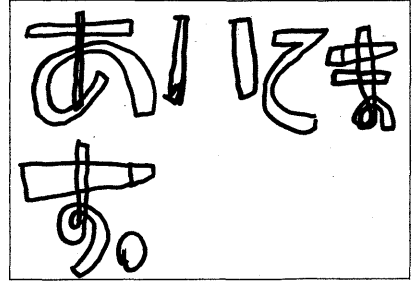
(3) 見ることで刺激される

あいてます N (四歳児) が遊びの中で始めて自分で看板を

書いた。それは鉛筆で弱々しく書かれてはあるがテーブルの前に張られた。Nはその日から遊びの始めには看板を「書くこと」を楽しんでいた。始めは書いた文字の大きさに合わせて紙の方を切っていたが、(図6) やがて紙に合わせて字の大きさを調節できるようになった。そして、一ヶ月たったある日、Lが新しい看板作りを楽しんでいる傍らで、Lと同じように中抜きで字で看板を書くことに挑戦で

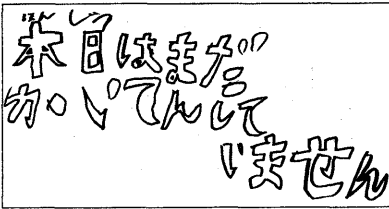
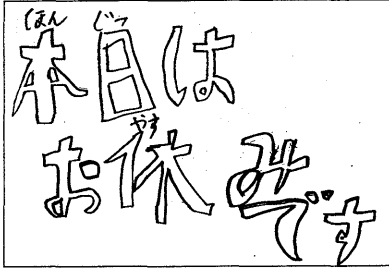
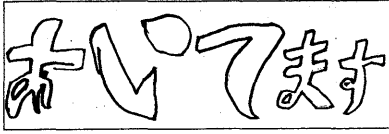


▲図6 Nの看板 (H4. 1)



▲図7 Nの看板(H4. 2)

▲図8 Lの看板(H4. 2)



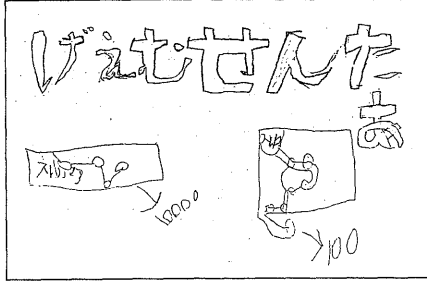
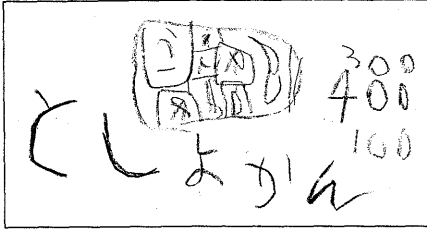
きるまでになった。(図7)この日、Lが書いた「あいてます」はNのまねをしたものだった。(図8)この日、LとNは互いに刺激され合っていた。

兄の傍らで兄と同じように看板を書くことができると、それは——早く兄のように大きくなりたいNにとって——大きくなったしるしであり、憧れの姿でもあった。

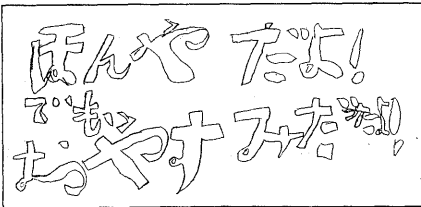
Nはこの一年の間、兄たちの傍らで遊び続けて——看板を私に「書いてもらうこと」で、それらを「見ること」で刺激され続けて——ついに、それを実現するところまでできた。

私はNのその姿を見たとき、「見ること」、「書いてもらうこと」でこの遊びを楽しむ姿も、自分で「書くこと」で楽しむ姿も、そのどちらも、この遊びを楽しむ子どもの姿であると気づかされた。

そして、この文字のある遊びが、その両方の姿の混じって遊ぶこと——そのときどきの自分の楽しみを追求



▲図9 Tの看板 (H3. 冬—上段、春—下段)



▲図10 Lの看板 (H3. 秋)

すること——のできやすい遊びであることを改めて知った。

*

入学をはさんだこの一年は、彼らが「書くこと」ができるようになりそれを楽しむようになっていった一年でもあった。(図9・10)

私はこの遊びが、彼らの中に育って来た「書くこと」への関心をマイペースで追求することができ、「書くこと」を楽しむことを共有することができる遊びだったから、一年もの間遊ばれ続けたのではないかと思っていた。

(舞々同人)